家

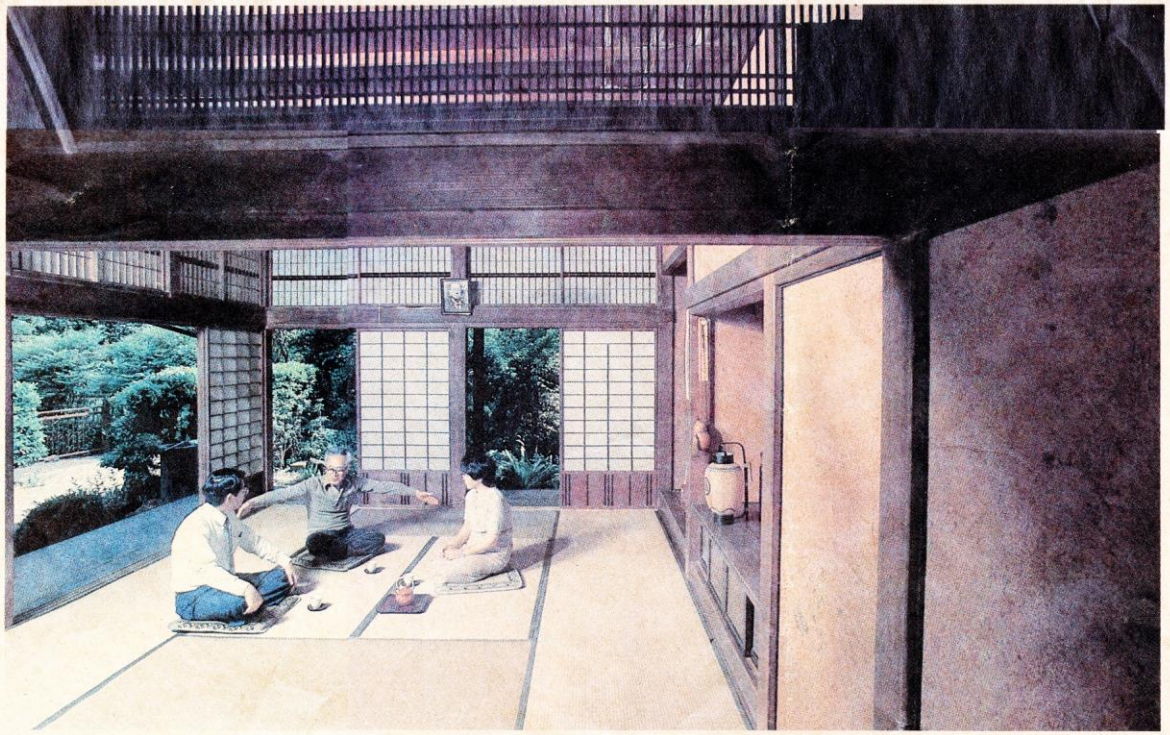
題字＝太原久雄氏（版画家）

"国境の町"の武家屋敷

風土に生きる

高屋敷と呼ばれる出水市の麓町一帯は、河原の丸石を積み重ねた石垣が多い。幕藩（つたがすら）に覆われた石垣の馬場は、格子縞（じま）の形で整然と交差し、五月の陽光に輝く生け垣の緑がまぶしい。交差点ごとに道路を少しずつずらしているため、こちらから向こうを見渡せない。百五十戸余ある区画を休が、"隠密行動向きの屋敷割"なのである。かつて肥後口・同境の町・だったことを、薬編み笠（がさ）のサムライたちが足早に往来したことだろう。人目を忍ぶ市女笠の女性も…。そんな想像をかきたてる雰囲気が、残り香のように漂ってくる。

回り縁に囲まれた表の間は10畳敷き。幾時代を経てもみずみずしい赤を失わない紅殻の土壁が特徴



出水高校の校門にある「出水兵児修養掟」の碑

郷士屋敷の独所塾子さん宅も、畳がざっと八十枚、ぐるりと囲うように生け垣や板の間、戸棚などを含めると何坪ぐらいになるのか、ちょっと見当がつかないほど広い。玄関の次の間は十二畳で、大井が段違いになっている。雨の日、屋内から外を眺めるため一部高くしたという。ここから外を眺めると、門の付近が真正面である。

さらに次の間の十八畳。石切りの囲炉裏端にある半畳ほどの板張りを持ち上げると、そこは脱出口だった。人目につかず床下から出入りできるようになっている。のぞいて見ると、漆黒の闇（やみ）が不気味に広がっていた。空気はひんやり頬（ほお）に冷たい。

座屋の外見は平屋建てだが、実は裏の間の上に屋根裏部屋がある。広さ約十畳。隠段のはしごをはね上げると、下から気づかれることは、まずない。"嗅（あつかい）家"という郷役の中核だったこの屋敷の、ここが作戦本部だったに違いない。密室でどんな密談がかわされたのだろうか。

郷士史などによると、税所家は慶長四年（一五九九年）、出水外城設置と同時に加世田から移封してきている。関ケ原の戦の前年だから、ずいぶん古い。鹿児島では鶴丸城の建設がその三年後にはじまっている。今の屋敷は一百五十年前に建ったといわれるが、「私が嫁いできたときも二百五十年前、今も二百五十年前、一体どうなってるんでしょうね」と敦子さんが笑うように、往時の記録はあいまいである。

明治十年、西南の役で一帯は戦場になった。出に避難した住民たちが、終戦の一報を聞いて四十日ぶりに戻ってみると、税所屋敷は官軍の前線本部になっていたそうだ。"薩摩塗りの赤い土壁に、文明開化気分の政府軍幹部が、ハイカラ趣味の異国情緒を感じたのだろうか。それとも、格式があって広いからという理由で接収したのだろう。

時代は下って太平洋戦争末期の昭和二十年、出水からも特攻機が出撃した。敦子さん宅には陸軍兵、六人が常時宿泊。二十歳前後の若い特攻兵士たちは、敦子さんを「母ちゃん」と呼んだ。物資不足で食糧難の時代。こっそりキャラメルを持ってきてくれる息子のような若者に、敦子さんは胸がつまった。ここにも特攻おばさんの慟哭（どうこく）の戦後史がある。

雲一つ、そよ風一筋もない静寂。薩摩・硫黄島の戦跡をたずね、阿川弘之の小説「雲の墓標」の一節が鮮烈によみがえった。

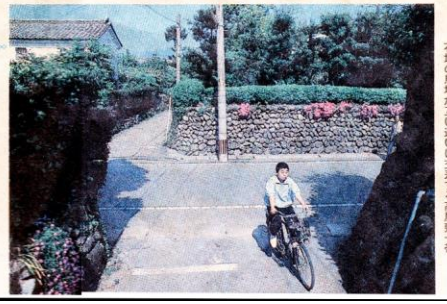
戦後になって、アメリカ軍が鹿児島に駐在したころ、民主主義のチャンジオン

防人の気概漂うたたずまい

出水市麓町の税所さん宅

～～メモ～～

税所屋敷は、かつて居宅のほか土蔵、馬屋、小屋、矢場、それに茶園、菜園など七棟を備えた二千㎡の敷地だった。現在は居宅と土蔵だけが残っている。見学者が多く、時には観光バスの団体もくる。出水市教委は、文化庁と県教委の助成で近く一帯を調査、文化財としての価値があらためて見直されそう。マイカー時代を反映して、由緒ある石垣をブロック塀に変えたい住民が苦慮するなど、県内最大規模を誇る武家屋敷一帯も、住む人にとっては悩みがない。



石垣の馬場が互い違いに交差する高屋敷一帯

キング女史がひょっこり訪れ、泊まったことがある。夏で蚊帳（かや）をつったところ大騒ぎしたが、翌朝いつまでたっても起きてこないため声をかけると出口がわからないんです」蚊帳の中をぐるぐる回っていたそうだ。エピソードは"ちょっといい話"として部の草になった。敦子さんは今も史と手紙のやりとりを続けている。

江戸時代の昔から明治維新、戦争と平和。それぞれの時代を生きた人々の喜びと悲しみを見つめてきた家。古びた座間や柱に、歴史の"こまごま"が走馬灯のように映ったり消えたりする。勝手に想像にふける。国境の防人（さきもり）たちんと心がけた出水兵児たちの生き方を聞いてみたかったと、とりとめもないことを夢想する。武家屋敷のたたずまいは、時空を超えて生命が吹き込まれていく不思議な魅力を持っていた。

文＝文化部・神薗　敏明
写真＝写真部・大山　秀一
＝おわり＝

「風土に生きる」シリーズは次回から「石」をテーマに連載します。